

第34回日本プラセンタ医学会大会 抄録

会期：2024年11月3日（日）
会場：西鉄イン福岡

一般財団法人
日本プラセンタ医学会

〔日本プラセンタ医学会 趣旨〕

プラセンタ療法は、全身の細胞に効果があります。そのことに気付いた先人の研究を引き継ぐ形で、わが国において50年以上にわたり飛躍的に発展を遂げてきました。

本医学会は、2007年の第1回大会から、プラセンタを積極的に使い、多くの患者さんを治療している先生方の経験を集約し、かつ、さらなる普及と発展に努めてきました。また毎年、基礎研究分野での新しい報告がいくつもあり、プラセンタの価値がさらに高まっていることを実感しております。

今後のプラセンタ療法の在り方は、多くの病気の源である“老化を治す”にあると考えています。ここ数十年、抗加齢治療の発展はめざましく、近年では“老化は病”となり、“老化を治す”の意識と共に、その原因を追究する基礎研究が進み、治療の確立に光が見え始めてきました。

私たちにできる事。それは、プラセンタ療法をアンカードラッグの一つとし、この療法に正しい理解を持つ医療者が尽力し協力し合ってより正確なデータを蓄積し、よりの確で最適なプラセンタの使い方を明確にしていくことです。

そして、この活動と情報を日本プラセンタ医学会の会員と共有し、多くの患者さんに届ける事により、“より豊かな人生”を提供できると考えます。

一般財団法人 日本プラセンタ医学会
理事長 中村 光伸

第34回日本プラセンタ医学会大会開催にあたって

氷河の流れのように プラセンタが明日への確かな「力」となるために

大会実行委員長 石束 麻里子
いしつか脳神経クリニック 漢方内科

第34回日本プラセンタ医学会大会の実行委員長を拝命いたしました、石束麻里子と申します。

今大会のメインテーマとして、福岡が世界に誇る中村哲先生のお言葉を拝借いたしました。(以下、引用文)

..我々の歩みが人々と共にある「氷河の流れ」であることを、あえて願うものである。その歩みは静止しているかの如くのろいが、満身に冰雪を蓄え固めて、巨大な山々を確実に削り降ろしてゆく膨大なエネルギーの塊である。我々はあらゆる立場を超えて存在する人間の良心を集めて氷河となし、騒々しく現れては地表に消える小川を尻目に、確実に困難を打ち砕き、かつ何かを築いてゆく者でありたいと、心底願っている。



プラセンタ治療は、中国700年代「本草拾遺」の記載が最古と考えられており、修治したヒト胎盤は「紫河車」という生薬名で、丸薬や煎じ薬として服用されてきました。その後1930年代の旧ソビエト連邦、眼科医フィラトフ博士が「組織療法」を開発。冷蔵保存した健康な臓器(胎盤、牛の脳下垂体、副腎、甲状腺など)を皮下に埋め込む研究が進み、最も治療効果の高い胎盤が移植されるようになりました。これが胎盤埋没療法であり、現在のプラセンタ注射製剤の源です。胎盤埋没療法は、日本でも1950年代に多様な疾患に効果があることが確認され、より簡便で安全にできる方法として、ヒト胎盤抽出エキスからなる注射液「メルスモン」と「ラエンネック」が日本で開発されました。共に半世紀以上に渡り、保険適用を承認されているという事実をまずは知っていただきたいです(注)。

当学会は2007年に発足し、2013年任意団体から一般財団法人「日本胎盤臨床医学会」へ、さらに2023年「日本プラセンタ医学会」へと名称変更いたしました。プラセンタの作用機序を、基礎研究および臨床研究などの「学術」を柱として解明する姿勢を継続し培ってきたことで、“プラセンタ”という名称を医学的に扱ってもよい段階に來たと判断したためです。学術大会にはこれまでに海外7カ国からのご参加があり、4カ国からの招待講演依頼を受けて参りました。このような国際交流と、国内外含めた多数の論文報告が、その確実な効果を実証しており、日本が誇るべき治療の一つと言っても過言ではないと感じております。

今大会では、「招待講演」にプラセンタの薬効としても鍵となる「睡眠」と「抗加齢」について、最新トピックスをご教授いただきます。また、分科会は現在、保険診療、ウェルエイジング、美容、東洋医学、歯科などの9部門がございしますが、その中の6部門から症例報告があり、即実践型の臨床応用を学んでいただきます。

最後に、中村哲先生のこれまでの偉業と現在進行中の活動について、長年傍で支え続けた方々のお話を伺うとともに、私たちが時折立ち止まって考える「医のころとは何か」という根源的な問いに向き合う時間になればと存じます。老いと病に立ち向かう「医のころ」を共有する多職種・多分野の専門家が集結し、「氷河のように山をも削る膨大なエネルギー」となり、今後の発展に繋がる大会となることを切に願っております。

福岡での開催は7年ぶりとなります。皆さまのご来福を心よりお待ちしております。

(注) 「メルスモン」1959年薬価収載。保険適用疾患「更年期障害、乳汁分泌不全」
「ラエンネック」1974年薬価収載。保険適用疾患「慢性肝疾患における肝機能の改善」

誰にでもできる不眠症治療

久留米大学医学部神経精神医学講座・教授
小曾根 基裕 (オゾネ モトヒロ)

座長：稗田 圭一郎 (医) 五常会 鶴巻メンタルクリニック・院長

略歴

平成元年3月 東京慈恵会医科大学医学部卒業
平成15年7月 東京慈恵会医科大学精神医学講座 講師
平成24年2月 スタンフォード睡眠研究所、スタンフォード大学医学部 精神神経・行動科学講座に客員准教授として留学
平成26年5月 東京慈恵会医科大学精神医学講座 准教授
平成31年4月 久留米大学医学部神経精神医学講座 准教授
令和2年11月 久留米大学医学部神経精神医学講座 主任教授
令和6年4月 久留米大学高次脳疾患研究所 所長
現在に至る



学位・認定医・その他

日本精神神経学会専門医・指導医、精神保健指定医、日本睡眠学会専門医、日本臨床神経生理学会認定医

評議員・その他

- ・日本睡眠学会 / 理事・認定事業推進委員会 (委員長) ・認定試験委員会 (委員長)
- ・日本精神神経学会 / 代議員
- ・九州神経精神医学会 / 理事・編集委員
- ・日本時間生物学会 / 評議員
- ・国立精神・神経医療研究センター / 睡眠・覚醒障害研究部客員研究員

所属学会

日本精神神経学会、日本睡眠学会、日本神経精神薬理学会、日本小児心身医学会、
日本時間生物学会、日本臨床神経生理学会、日本生物学的精神医学会、九州神経精神医学会

出版雑誌

- ・過眠症 (ナルコレプシーを含む) 今日の治療指針2022 <医学書院>
- ・学童期・思春期における睡眠教育のポイント <日本医師会雑誌2021年>
- ・精神科専門医をみぞす人への助言 専攻医研修で学ぶべきもの <九州神経精神医学2023年>
- ・不眠症に対する漢方薬の有用性 <臨床精神医学2024年>

不眠症は、現代社会において広く蔓延する健康問題であり、患者の生活の質を著しく低下させる原因となる。本講演では、一般医でも十分取り組むことができる不眠症治療法について、わかりやすく紹介する。

まず、不眠症の診断では以下の3要素がそろっているかを確認する。1) 不眠症状があること、2) 適切な睡眠環境が整っていること、3) 日中の機能障害をともなっていること。

次に睡眠の現状を把握するため、睡眠日誌や睡眠アプリなどを用いて2週間以上の睡眠状態を確認する。

治療法には薬物療法以外に睡眠衛生指導や不眠に対する認知行動療法 (CBT-I) がある。CBT-Iは、睡眠衛生指導、睡眠制限療法、刺激制御療法、及び認知再構成を含む包括的なアプローチである。これらの方法は、睡眠習慣の改善とともに、不眠時の行動様式や不眠に対する不安や誤った信念を修正することを目的としている。

薬物療法は、非ベンゾジアゼピン系睡眠薬やメラトニン受容体作動薬、オレキシン受容体拮抗薬、漢方薬が使用される。依存の少ないオレキシン受容体拮抗薬やメラトニン受容体作動薬を優先し、非薬物療法を活用し症状寛解後は減薬、休薬を検討することが望ましい。

抗加齢医学からみた漢方薬

鹿児島大学漢方薬理学講座・特任教授

乾 明夫 (イヌイ アキオ)

座長：長瀬 眞彦 吉祥寺中医クリニック・院長
日本プラセンタ医学会・名誉理事、日本東方医学会・
会長、順天堂大学医学部 医学教育研究室・非常勤助教

略歴

1978年3月 神戸大学医学部卒業
1984年7月 神戸大学医学部助手
1997年12月 神戸大学医学部附属病院講師
2000年1月 神戸大学医学部助教授
2005年1月 鹿児島大学大学院心身内科学分野教授
2012年7月 鹿児島大学病院漢方診療センター長
2018年4月 鹿児島大学大学院漢方薬理学講座特任教授
現在に至る



専門・指導医

内科学会指導医・認定医、心療内科学会専門医、消化器病学会指導医・専門医、
内分泌学会指導医・専門医、老年医学会指導医・専門医、肥満学会専門医、自律訓練法専門指導

受賞歴

1997年 第3回日本肥満学会賞
2003年 第1回日本心身医学会池見賞
2004年 第10回米国消化器病学会ヤンセン賞
2014年 第15回日本行動医学会荒木記念賞（共同受賞）
2015年 第17回日本行動医学会内山記念賞（共同受賞）
2017年 蟹江松雄賞功労賞(焼酎機能性の解明と啓蒙)

フレイルはサルコペニア（骨格筋萎縮）を骨子とした心身のシンドロームであり、漢方で言う未病病態に近い。フレイルを予防・治療することによる健康寿命の延長が、世界的にも愁眉の課題となっている。多成分系の漢方薬は、食欲不振・サルコペニア・不安・抑うつ・認知など、加齢や疾患に伴うフレイルの治療に威力を発揮するものと期待される。

漢方医学では、サルコペニアは脾虚として捉えられ、人参養栄湯をはじめ補剤の良い適応となってきた。老化はまた腎虚として解され、補腎剤や補剤・補腎剤の併用投与が行われてきた。プラセンタは紫河車として知られ、温腎補精、益気養血、安心などの効用が謳われ、併せ用いられてきた。

フレイルに代表される社会の高齢化は、ポリファーマシー、医療経済の破綻といった負の側面のみならず、老化機序の解明や抗老化薬（Geroprotector）の開発など、大きな学問的進歩をもたらしつつある。本講演ではこの進歩に触れながら、人参養栄湯、プラセンタ（紫河車）など補剤・補腎剤の抗サルコペニア・フレイル作用を、がん・老化モデルマウスやゼブラフィッシュを用いた我々の研究成果を含めて述べる。

中村哲を支えた人たち ～偉業の真意に迫る～

ペシャワール会PMS支援室・室長 / PMS・総院長補佐
藤田 千代子 (フジタ チヨコ)

座長：石東 麻里子 いしつか脳神経クリニック 漢方内科

略歴

鹿児島県出身。

徳洲会病院（福岡市）勤務を経て1990年9月、当時中村哲医師の赴任先であったパキスタンペシャワールのミッション病院へ看護師として赴任。以降、医療活動を始め、井戸掘り、食糧配給、その後の用水路事業等、一貫して中村医師の現地活動を支えてきた。

1998年 日本の寄付でペシャワールに建てられたPMS基地病院（総院長・中村哲）では、院長代理の責務を果たした。

2009年 現地の治安悪化のため退避帰国し、現在ペシャワール会PMS支援室 室長およびPMS総院長補佐として、現地活動を支えている。

2022年 フローレンス・ナイチンゲール勲章を受章。現在に至る



私たちは、ハンセン病診療を柱としつつ、1つの基地病院と、パキスタン・アフガニスタンの山岳地帯に、最大11ヵ所の診療所を開設し活動してきた。ところが、2000年夏、アフガニスタン全土で大干ばつが一举に進行し、渇水で畑は干上がり、砂漠化が深刻化した。干ばつで診療所のある村がまるごと難民化することもあった。診療所があっても水がない。村人の生存そのものが不可能な事態まで追いつめられていたのである。

飢えと渇きは薬では治せない。きれいな水があれば、感染症や皮膚病の予防にもなる。1600本の井戸を掘り、2003年からは農業用水路の建設を始めた。現在までに私たちが建設した農業用水路で復活した農地は23800ha。およそ65万人以上の生存を確保することができた。農地が無ければ難民になるか、武装勢力や外国軍の傭兵になるしかない人々である。井戸水や農業用水を確保することによって生命の維持と疾病の予防がもたらされただけでなく、地域の治安安定にも寄与した。

美容皮膚科分野でのプラセンタ療法

医) 千美会 千春皮膚科クリニック・院長
渡邊 千春 (ワタナベ チハル)

座長：鄭 栄鳳 医) 鳳栄会 清水スキンクリニック・院長
五十嵐 豪 五十嵐レディースクリニック・院長

略歴

1993年 東京医科大学卒業
東京医科大学皮膚科勤務
1997年 板橋中央病院皮膚科医長
1999年 東京医科大学皮膚科勤務
2000年 東京医科大学皮膚科助手
2003年 肌クリニック大宮 院長
2008年 肌クリニック大宮 ベルビー赤坂 総院長
2012年 千春皮膚科クリニック 開院
2019年 千春皮膚科クリニック広尾院 開院



所属学会・資格

医学博士

日本皮膚科学会認定皮膚科専門医、日本プラセンタ医学会理事、
日本レーザー医学会専門医・評議員、AMI Japan Senior Trainer (アラガン社指導医)、
日本アレルギー学会会員、日本臨床皮膚科外学会会員、日本抗加齢医学会会員、
日本美容皮膚科学会会員、日本医学脱毛学会会員

プラセンタはメラニン色素を抑制し、コラーゲン（ハリ、ツヤ）、ヒアルロン酸（水分）、エラスチン（ハリ）等の再生を促進します。また、体内の新陳代謝を活発にして、血行を促進し、免疫力を高め、過酸化脂質や活性酸素など肌の老化の原因を抑えると言われています。プラセンタは安価で安全性も高く、他の施術と組み合わせて治療することで相乗効果をもたらすことができ当院では皮膚科一般治療だけでなく、しみ、しわ、ニキビ、毛穴などの美肌治療を目的としてさまざまな肌治療にプラセンタを用いています。例えばイオン導入は、電気の反発力を利用して真皮内に有効成分を押し込む方法で通常の外用の200倍の浸透力があると言われており、当院では、5%ビタミンC溶液と同時にプラセンタを導入することで美白効果を高めています。その他、エレクトロポレーション、メソセラピー、熱機械式アブレーションなどと組み合わせて使用しており症例を供覧致します。

更年期を幸年期にするプラセンタ療法 ～人生100年時代をポジティブに～

医) いぶき会 針間産婦人科・院長
金子 法子 (カネコ ノリコ)

座長：鄭 栄鳳 医) 鳳栄会 清水スキンクリニック・院長
五十嵐 豪 五十嵐レディースクリニック・院長

略歴

長年にわたり、年間30-40回の性教育、人権教育、女性の健康教育などの講演活動を行っている。

クリニックには2021年春より「にじいろ外来」を設置し、公認心理師とともに主に性別違和の当事者の方の相談、診療にあたっている。

専門医・認定医・その他

日本産婦人科学会専門医、母体保護法指定医、日本性感染症学会認定医、日本抗加齢学会専門医、日本スポーツ協会公認スポーツドクター、日本医師会認定健康スポーツ医、日本産婦人科学会認定女性ヘルスケアアドバイザー、日本思春期学会性教育認定講師、女子フットサルトップリーグチーム「ミネルバ宇部」のチームドクター



受賞歴

第五回西予市おイネ賞全国奨励賞受賞

2017年度山口県医師会功労賞受賞

最近では更年期に関して、マスメディアやSNSが取り上げることも多く、更年期の過ごし方や更年期障害の治療法について多くの女性が知る世の中となった。バブル世代が更年期を乗り越えた昨今、人生100年時代に向けて、さらなるアンチエイジングを希求するようになってきた。2023年の女性の平均寿命は87歳、健康寿命は75歳であり、QOLに直結する健康寿命を延ばすのが喫緊の課題である。女性のライフステージから区別すると、成熟期の後は、更年期、老年期と女性にとっては成熟期を過ぎればあとは下り坂、、、という空気が言葉一つからも伺える。

更年期は更に歳をとる時期ではなく、「幸せに歳を重ねる時期」であるべきで、そのためにはゆっくりと自分と向き合い、身体の変化と心のゆらぎを正しく理解した上で、適切なホルモン補充療法などの治療やサプリメントの摂取、運動をはじめとする生活習慣の改善が推奨される。

更年期から老年期(演者的には成熟期などの言葉に変えて欲しい!)にかけて、心身ともにハッピーに生きていくためのヒントと、その一翼を担うプラセンタ療法について、これまでに経験してきた数々の症例の提示と、どのような効果が期待できるかをお話したい。

保険診療におけるプラセンタ製剤

山本医院・院長

山本 俊昭 (ヤマモト トシアキ)

座長：鄭 榮鳳 (医) 鳳栄会 清水スキンクリニック・院長
五十嵐 豪 五十嵐レディースクリニック・院長

略歴

1962年神戸市生まれ

京都大学で有機化学を学んだ後、滋賀医科大学卒業

京都大学病院、関西電力病院等で主に肝臓の治療に従事

京都市内に内科診療所を開業と同時に、ラエンネック、

メルスモンを使った穏やかな加療を行っています



現在のプラセンタ製剤の使用状況を推察しますと、とても効能の幅の大きい薬剤であるが故、自由診療での使用が保険診療より多い印象を受けます。しかしながら厚労省の認可を受けた製剤ですから、適応病名に対して適切に使用すれば当然保険診療が成立するわけです。

保険診療としてプラセンタ製剤を使用する場合、選択肢はメルスモン製薬のメルスモン、日本生物製剤のラエンネックの2製剤しかありません。メルスモンは昭和31年に、ラエンネックは昭和34年に認可された歴史ある製剤です。いずれも60年以上にわたり使用されており重大な副作用等も発現しておりません。また長期にわたり注射を受けている患者さんもたくさんおられます。

このように身体に優しいプラセンタ製剤の保険診療の実際、および使用経験についてお話ししたいと思います。

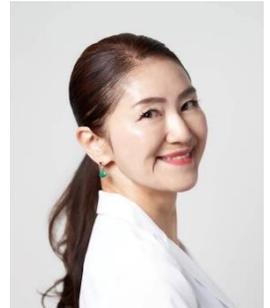
プラセンタとハーブピーリングでの症例 報告

株式会社 三.一.五・代表取締役
上田 珠良 (ウエダ タマオ)

座長：中村 光伸 (医)最匠会 光伸メディカルクリニック・理事長
北野原 正高 きたのはら女性クリニック・院長

略歴

1967年 山口県生まれ
1985年 広島大学 学校教育学部卒業
2006年 主婦、エステサロン勤務を経て「エステサロン エンジェル」設立
2018年 株式会社三.一.五 設立しTIPブランド立上げ、スクール事業、卸業開始



古くからヨーロッパでは、湖底に生息する海綿を使用した民間療法としてハーブピーリングが行われてきました。

棘状の海綿(スポンジア)をマッサージテクニックにより皮膚(毛穴)から浸透させることで、人間が持っている異物反応が働き、血液循環と新陳代謝が活発化し、ターンオーバーが正常化するという理論です。

このハーブピーリングで、肌質が改善する過程において、プラセンタ化粧品による抗炎症作用や細胞賦活作用、プラセンタ内服による内分泌調整作用や自律神経調整作用が大いに役立つことを見出しました。

今回、このハーブとプラセンタを使用したいくつかの症例を供覧させていただきます。

プラセンタ組織療法

原クリニック・院長
原 靖 (ハラ ヤスシ)

座長：中村 光伸 (医)最匠会 光伸メディカルクリニック・理事長
北野原 正高 きたのはら女性クリニック・院長

略歴

- 1994年 久留米大学医学部卒業、同大学外科学教室入局
- 2001年 久留米大学大学院 医学研究科外科系専攻博士課程卒業
社会保険田川病院、甘木朝倉医師会立朝倉病院、原外科医院などを経て
- 2013年 原クリニックを開院し、現在に至る



「ヒト胎盤」を利用したプラセンタ療法の中の一つに「プラセンタ組織療法」がある。これは以前には胎盤埋没療法と言われていて、その言葉どおり“胎盤を身体に埋め込む”という治療法である。多くの医療機関で使用されているヒト胎盤抽出物由来の注射製剤であるメルスモンやラエンネックに比べて手間もかかる為、施術している医療機関はとて少く現在では一種独特な治療法であろう。当院は1989年（平成元年）からこの療法に携わってきており、自家製剤で今日までこの療法を行ってきた。

今回は短い時間ではあるが、プラセンタ組織療法の概略と治療を行った症例をお話しさせて頂く予定である。

プラセンタ経穴注射と漢方エキス製剤の併用が 奏効した重度腰椎椎間板ヘルニアの一例

いしつか脳神経クリニック 漢方内科
石東 麻里子 (イシツカ マリコ)

座長：中村 光伸 (医)最匠会 光伸メディカルクリニック・理事長
北野原 正高 きたのはら女性クリニック・院長

略歴

久留米大学医学部医学科卒業

臨床研修修了後、精神科医であり漢方医でもある父が手術ミスで意識不明になり、父の医院を急遽継ぐことになる。プラセンタ経穴注射や漢方処方を求める患者さんに、父のカルテと東洋医学書を頼りに、必死に向き合う中で確実な効果を実感し、東洋医学に魅了されていく。

2009年 中国や韓国に翻訳出版されている「経方医学」の著者である江部洋一郎に師事し、3年間難治性疾患に対する漢方治療を学ぶ。傷寒論と金匱要略の脈診について体系的にまとめた「経方脈学」を共同執筆。

2012年 ミディ漢方医院福岡を開院。

2020年 夫の医院であるいしつか脳神経クリニックに漢方内科を開業、現在に至る。自身出産時の胎盤を「紫河車」に修治した経験から本学会に入会し、プラセンタ経穴注射を専門とする。



【症例】

40代、女性。X年11月、左坐骨神経痛と歩行困難が出現。整形外科受診し、MRIにてL5/S1腰椎椎間板ヘルニアを認めた。鎮痛薬等の服用、神経根ブロック注射を数回施行されたが、症状の改善は一時的であった。歩行困難が継続するならば手術になると整形外科の医師から告げられ、東洋医学的アプローチができないかとX年12月に当院を受診した。腰椎MRI画像所見ではL5/S1髄核脱出型腰椎椎間板ヘルニアを認め、腰部から左下肢への放散性疼痛、左S1領域の痺れ、歩行時の左下肢脱力感が著しく、歩行困難な状態であった。初診時より、プラセンタ経穴注射（主穴：関元兪）と、牛車腎気丸合当帰芍薬散エキス製剤を開始。1ヶ月後歩行可能となりエキス製剤を減量、3ヶ月後には経穴注射のみ継続とし、日常生活が支障なく過ごせるようになった。

【考察・結語】

腰椎椎間板ヘルニアの60%以上の例で、3ヶ月以内に、マクロファージから放出されるTNF- α などのサイトカインやMMP、VEGFといった因子が関与してヘルニアが自然退縮するため、保存療法（薬物治療や硬膜外ブロック注射）が主であるが、馬尾症候群（両下肢の疼痛、感覚障害、運動障害、膀胱直腸障害、会陰部の感覚障害）を示す場合には予後不良とされ、保存療法を一定期間行っても改善しない場合に手術適応になる。ただし、薬物治療において世界各国で鎮痛薬、筋弛緩薬、抗うつ薬などによる治療が一般的に行われているが、これらの薬物の効果を検討したシステマティックレビューやRCTは存在していない。このため、東洋医学的治療が一助となり得るのではないかと考えている。本症例は漢方薬を減量中止し、経穴注射のみの継続で症状改善できているため、プラセンタ経穴注射がより有効であったと考えられる。筆者は紫河車の代用としてプラセンタ注射製剤を使用しているが、経穴注射には臨床応用のさらなる可能性を感じている。

慢性腎障害モデルマウスにおけるウマプラセンタエキスの影響

株式会社 日本生物製剤 メディカルアフェアーズ・部長
平野 栄一 (ヒラノ エイチ)

座長：川口 光彦 医) 川口内科 川口メディカルクリニック

略歴

2002年3月 九州工業大学大学院情報工学研究科情報科学専攻生物システム工学分野
(情報工学博士号取得)
2002年3月 Washington University School of Medicine Cell Biology and Physiology
2005年10月 久留米大学医学部消化器疾患情報講座
2006年4月 久留米大学医学部先端癌治療研究センター肝臓部門
2008年4月 (株)日本生物製剤



インドキシル硫酸(IS)はトリプトファンの食事性代謝物に由来し、慢性腎臓病の進行を促進する尿毒症性物質である。我々は、肝S9画分を用いたin vitroスクリーニングにおいてウマプラセンタエキス (ePE) がISの合成を阻害することを見出した。この効果を、IS産生を誘導して慢性腎障害を誘発するアデニン食餌モデルマウスを用いて、生化学的および病理学的にin vivoで検証した。

アデニン食餌マウスにおいて、ePEは血清、腎、肝のIS産生を有意に抑制した。これらの結果は、肝臓におけるCYP2A5、CYP2E1、SULT1などのIS代謝酵素の遺伝子発現の変化に起因するものではなかった。ePEの投与は、腎症のマーカーである血中尿素窒素値の上昇を引き起こさなかったが、アデニン食餌マウスのクレアチニン値を低下させた。病理学的解析と尿細管間質傷害指数を用いた半定量的解析により、ePEはアデニンによって誘導されるメサンギウム陽性細胞面積の増加を有意に抑制することが明らかになった。さらに、アデニンによって誘発されたマウスの腎線維化は、ePE投与によって有意に抑制された。さらに、免疫組織化学的解析の結果、ePE投与により、間質性炎症浸潤におけるF4/80陽性マクロファージの集積が有意に抑制された。これらの結果から、ePEは腎間質におけるIS産生を抑制することで、アデニン食餌マウスのIS誘導による腎障害を改善できることが示唆された。

コタロー漢方エキス製剤の特徴

小太郎漢方製薬(株)学術情報課・課長
三室 洋 (ミムロ ヒロシ)

略歴

1975年 兵庫県神戸市生まれ
1999年 京都大学経済学部卒業
1999年 株式会社エム・アイ・ティー入社。プログラマー、SEなどの業務を担当。
2005年 カネボウ薬品（現クラシエ薬品）株式会社入社。MR（医療用）として6年、
学術（医療用）として2年勤務。
2013年 小太郎漢方製薬株式会社入社。学術情報課に勤務。2014年から課長。
現在に至る。

一般社団法人日本漢方協会 学術講師

著書：『なんとなくわかった気になる漢方の歴史』あかし出版（2019年）



「漢方エキス製剤っていろいろなメーカーがあるけれど、どこの製品も同じなの？」そのような疑問をお持ちになったことはないでしょうか。この疑問に簡単にYes/Noで答えるのはなかなか難しいですが、メーカーが「良い製品」を作るためにこだわりを持ち、様々な努力や工夫を行っているのは確かです。そのような製剤の「特徴」を知っておくことは、医療従事者にとって有用なのではないでしょうか。

漢方エキス製剤ができあがるまでには主に次のような工程があります。①原料生薬を調達②生薬を水で抽出③抽出液を濃縮④濃縮液を乾燥⑤乾燥エキス粉末と添加剤を混合⑥細粒・顆粒・錠剤などの剤形に整える⑦包装する。これらの工程の中で、様々な努力や工夫を行っています。また、生産拠点の立地、品質管理や安全管理（検査）、生薬の配合などにおいてもいろいろなこだわりがあります。

本セミナーでは弊社・小太郎漢方製薬株式会社がどのようなこだわりを持ち、どのような努力・工夫を行っているのか、その一部をご紹介します。

犬猫の腎機能低下症におけるプラセンタの使用

麻生獣医科医院・院長

上田 裕 (ウエダ ユタカ)

略歴

福岡県出身

1987年 北里大学獣医畜産学部獣医学科卒業

1994年 麻生獣医科医院を開院

2011年 米国テネシー大学公認 動物理学療法士 (CCRP) 取得

CCRP : Certified Canine Rehabilitation Practitioner

2017年 国際中医師「International TCM Doctor」(B級)取得

所属

獣医師、動物理学療法士 (CCRP)、国際中医師 (B級)、麻生獣医科医院院長

日本ペット中医学研究会会長、日本伝統獣医学会会員、日本獣医皮膚科学会会員

カコ動物看護学院講師、国際中獣医学院講師



死因の上位にあるにも関わらず犬猫の慢性腎臓機能不全症は症状の発現の遅さから診断時にはかなり進行している患畜に遭遇することが多く、また治療に対しても患畜の協力も得づらい場合が多く症状の進行を止めることが困難で、治療開始後短い期間で亡くなってしまう場合が多い疾患です。近年当院では西洋医学的治療と中医学的治療を併用することで本症に対してある程度の延命が出来たと考えられる症例をいくつか経験しました。

この治療の中でQOLの維持はとても重要な要因です。特に食欲に関しては最も重要な項目だと思われます。しかし食欲廃絶の患畜の「なぜ食べないのか」の答えを見つけることはとても困難な課題であり、本当の正解を導くのは不可能だと思われます。

その中で薬理的な作用と栄養学的な作用を併せ持ち、投与の簡便性もあり、嗜好性もあるプラセンタ製剤を併用することで食欲が改善しQOLの維持管理の一助になっていると思われる症例を今回報告させていただきます。

協賛企業

株式会社 日本生物製剤

北海道ナチュラルバイオグループ 株式会社

株式会社 UTP